

一・「四字熟語」

「四字熟語」＝「四字熟語」は深みのある日本語だ。日常の会話や文章の中で頻繁に使われている。中国の古い書物などに由来しているものもある。

《「二つの数字」を使った「四字熟語」と、その例文》



◇「一期一会」

「一生に一度会うこと。一生に一回だけ」ということ。茶道の言葉。

- ・常に一期一会の気持ちで、人との出会いを大事にしなければならない。
- 一期＝「人間が生まれてから死ぬまでの間」。一生、一生涯という意味。
- ・一期の思い出に世界一周旅行をしてみたい。

◇「一字千金」

「一つの文字が千金の値打ちがある」という意味で、文章の価値が高いこと。

- ・彼の論文は実に素晴らしい。内容が幅広く、深みがあるだけでなく、文章が洗練されている。正に、一字千金の価値がある。
- 千金＝「千両の金」という意味。「多額の金銭」、「非常に高い価値」ということ。〈「両」は明治時代以前の金貨の単位〉
- ☆中国・北宋時代の詩人・蘇軾の『春夜』に「春宵一刻值千金〈春の夜の一時は千金に値するほど素晴らしい〉がある。
- ・先生の言葉は、千金の値打ちがある。

◇「一汁一菜」

「一種類のお汁と一種類の野菜のおかげ」から、質素な食事のこと。

- ・終戦直後の日本人の生活は貧しくて、国民の毎日の食事は、文字通り、一汁一菜だった。

◇「一獲千金」

「一度にたくさんのお金を手に入れる」こと。

- ・彼は、宝くじや競馬など好きだ。いつも一獲千金を夢見ている。

◇「一挙一動」

- 「一つ一つの行動や動作」のこと。「一挙手一投足」ともいう。
- ・舞台で演じられた俳優の一挙一動に、観客席から大きな拍手が沸き起こった。

◇「一喜一憂」

- 「ちょっとした事で喜んだり、心配したりすること。」
- ・人生にはいろいろなことが起こる。小さいことに一喜一憂しない方がよい。

◇「一罰百戒」

- 「一人を罰して、百人が罪を犯さないように戒める」こと。
- ・有名人の彼が交通違反で逮捕されたのは、一罰百戒の意味が込められている。

◇「一望千里」

- 「千里離れたところまで見渡せる」ことから、広々とした眺めのよいこと。
- ・山の頂上に登ったら、一望千里だ。目の前に美しい広大な景色が広がっていた。

◇「一挙兩得」

- 「一つのことをして、二つの得をする」こと。〈次の「一石二鳥」も同じ〉。
- ・自転車通勤は、健康に良いし、交通費の節約にもなり一挙兩得だ。

◇「一石二鳥」

- 「一つの石で二羽の鳥を落とす」ことから、一つのことで二つの利益を得ること。
- ・スポーツは、健康にいいだけでなく、友達もできるので一石二鳥だ。

◇「一日三秋」

- 「一日会わないと、三年も会わないように感じられる」ことから、慕う気持ちが強く、待ち遠しいこと。「一日千秋」ともいう。

- ・彼女は、日本に留学している彼の帰国を一日三秋の思いで待っている。

三秋＝「三度の秋を送る」ということから、「三年間」の意味。「長い間、待ち遠しい」という気持ち。

☆中国の『詩経』に、「一日見ざれば、三秋の如し」という表現がある。

- ・皆さんのご来訪を一日三秋の思いでお待ちしています。

◇「一進一退」

- 「一歩進んだかと思うと、一歩後退すること。」
- 良くなったり悪くなったりすること。なかなか良い方向へ進まないこと。
- ・彼女の病状はなかなか回復しない。一進一退を続けている。

◇「一世一代」

「一生、生きている間に一回だけ」ということ。

一生に一回しかないほど、大きな出来事であったり、優れていたりすること。

- ・彼女は、昨日の舞台上、女優として一世一代の芸を披露した。

◇「一朝一夕」

「朝と夕方、昨日と今日というような短時日」のこと。

- ・この計画を一朝一夕に実現させることは困難だ。全員の継続的な努力と長い日時が必要だ。

◇「一長一短」

「何事も長所あれば、短所もある」ということ。

- ・市役所から駅前都市再開発構想が発表された。しかし、周辺の住民にとっては一長一短あり、賛成か反対かの態度をすぐ決めるのは難しい。

◇「一波万波」

「一つの波が、何万もの波を起こす」ことから、「小さなことが、段々大きな影響を及ぼす」という意味。

- ・彼の発言はいつもの的確だから、一波万波のように、多くの人々に大きな影響を与える。

◇「二束三文」

「江戸時代の初期、丈夫な草履が二足で三文と、安かった」ことから、数が多いのに値段が極めて安いこと。あまり価値がないこと。

〈後に、「二足」の代わりに、「二束」の字が使われるようになった〉

- ・新しい製品が次から次に売り出されるので、今、持っている電気製品は、古くなって、二束三文の値打ちしかない。

◇「二人三脚」

「二人が肩を組み、内側の足を紐で結んで三本の足のようになって走る競技」を

「二人三脚」という。小、中学校の運動会などで、人気のある楽しい競技。

二人が力を合わせて目的に向かって進むこと。

二人が協力して物事を解決すること。

- ・夫婦はどんなことがあっても、二人三脚で助け合っていかなければならない。

◇「三位一体」

「三つの要素が一つに結びつく。三者が一体になって協力すること。

- ・知識、体力、道徳が三位一体となった教育が理想的だ。

◇「朝三暮四」

口先で人をだましたり、言いくるめたりすること。

また、結果は同じなのに目先の利益にこだわること。

☆中国・春秋時代の宋の国で、ある人が猿に「どんぐり」のえさを「朝三つ、暮れ(夕方)に四つ」やったところ、猿が怒った。そこで、逆に「朝四つ、暮れに三つ」やったら猿が喜んだという故事から。

・彼は話が上手だから、朝三暮四のようなやり方に、気をつけた方がいい。

◇「三寒四温」

「初春に三日間、寒さが続いた後、四日間、温暖な日が続くのを繰り返すこと」から、気候が段々暖かくなっていくこと。

・春は名のみですが、これから、三寒四温で少しずつ、暖かくなっていくと思う。

◇「再三再四」

「三度も四度も。しばしば」ということ。

・彼は金遣いが荒いので、再三再四注意したが、なかなか直らない。

◇「四角四面」

「四角ばっている」ことから、「すごく真面目なこと。堅苦しい」意味。

・彼は四角四面の性格なので、冗談が通じない。

◇「四分五裂」

「四つに分かれ、五つに裂ける」ことから、「いくつにも分裂すること。ばらばらで秩序がないこと」。

・あの政党は、幹部がそれぞれ自分の思惑と考え方で勝手に行動している。四分五裂の状態だ。

◇「四苦八苦」

人間が一生に味わう苦しさの総称。一般には、「さんざん苦労すること」。

仏教で言う「四苦」は「生・老・病・死」の四つの苦しみのこと。これに、「愛する者と別離する」、「怨み憎んでいる者に会う」、「求める物が得られない」、「人間の肉体と精神が思うがままにならない」の四つの苦しみを加えたのが八つの苦しみ、つまり「八苦」。

・留学生の多くは、物価高やバイト探しで、日本で勉強するのに四苦八苦している。

◇「四捨五入」

「4以下の数字は切り捨て、5以上は切り上げる」こと。

・1.4と1.8を、それぞれ四捨五入すると、1と2になる。

◇「五臓六腑」

「人間の内臓のすべて。体全体」のこと。

「臓」とは「肝、心、脾、肺、腎」の五つ。

「六腑」とは「大腸、小腸、胆、胃、膀胱、三焦（リンパ管）」の六つをいう。

- ・寒い時に、お酒を飲むと、五臓六腑にしみわたる。

◇「七転八起（七転び八起き）」

「七回転んでも、八回目に起き上がる」こと。

つまり、「何度失敗してもくじけずに奮闘する」こと。

- ・彼は何回も事業に失敗したが、いつも七転び八起きの気持ちで頑張ったので、今は成功し、立派な大実業家になった。

◇「七転八倒」

「七回転んで、八回倒れる」ことから、転げまわって苦しむこと。

- ・彼は胃の病気で何度も入院し、手術を繰り返して、七転八倒の苦しみを味わった。

◇「八面六臂」

「面」は顔。「臂=臂（肘）」は腕の上半部、あるいは、その曲げた外側の部分。

「八つの面（顔）と六つの臂（肘）」から転じて、一人で数人分の働きをするなどの手腕を発揮したりすること。

- ・今日の野球の試合は、ピッチャーの彼が相手チームを0点に抑え、打っては満塁ホームランなどで5打点を入れた。彼の八面六臂の大活躍でわがチームが大勝した

◇「九死一生（九死に一生）」

「ほとんど死にそうだった状態から立ち直って生きる」こと。

- ・彼は冬山で遭難したが、九死に一生を得て奇跡的に生還した。

◇「九牛一毛（九牛の一毛）」

「九頭の牛の中のわずか一本の毛」ということから、たくさんの中でごくわずかなこと。

- ・二千人を超える社員の中で、会社の再建案に反対したのはわずか5、6人で、九牛の一毛に過ぎなかった。

◇「十年一昔」

「十年経てば、もう昔のことだ」、「十年を一区切りとして、その間には大きな変化がある」ということ。

- ・十数年ぶりに友人に会ったが、歳を取った感じだった。十年一昔とはよく言ったものだ。

◇「十年一日」

「長い年月の間、同じ状態である」こと。のんびりしていること。

- ・社長の考えは十年一日の如しで、昔から同じだ。社業が発展しない。新しい事業に挑戦する意気込みが必要だ。

◇「十人十色」

「人の好みや考え、性格はそれぞれ違いがあり、まちまちである」こと。

- ・人の好みは十人十色だから、旅行計画をまとめるのに時間がかかる。

◇「百戦百勝」

「百回戦って百回勝つ」こと。「いつも勝つ」という意味。

- ・彼のチームは、百戦百勝の勢いだ。

◇「百人百様」

「百人が百の様（姿）をしている」ことから、人はそれぞれ異なっているという意味。

- ・会社の将来について、みんなの意見を聞いたが、様々な話が飛び出した。
まさに百人百様だった。

◇「百発百中」

「百発の矢や弾丸を放って、百発すべてが的に命中すること。

転じて、計画や予想などが、すべて思った通りに進むこと

- ・彼の予想は実によく当たる。正に百発百中だ。

◇「百聞一見〈百聞は一見に如かず〉」

「百回聞くより、一回でも、自分の目で見る方が確かである」ということ。

- ・金閣寺の素晴らしさは、いろいろ話には聞いていたが、京都に来て実際に見たら、その美しさがよく分かった。やっぱり、百聞は一見に如かずだ。
〈注〉如かず＝及ばない。

◇「千慮一失〈千慮の一失〉」

「千回思慮して、その中で一つ失敗がある」ということから、思慮深い人でも、時には過ちがあるということ。

☆ 中国の『史記』の中に、「智者も千慮に必ず一失有り、愚者も千慮に必ず一得有り」とある。

「賢い者でも時には思い違いもあり、愚かな者でも、いろいろ考えるうちに、たまには取り得のあることもある」という意味。

- ・彼はいつも、よく考えて慎重に行動するからこれまで過ちを犯したことはないが、今度の失敗は、正に千慮の一失だった。

◇「千載一遇」

「千載」は千年。「千年に一回遇（会う）」ことから、きわめて珍しい機会、長い期間に、一回だけの絶好のチャンスのこと。

- ・彼に出会ったのは千載一遇のチャンスだから、いろいろなことを教えてもらった方がよい。

◇「千差万別」

たくさんのものには、「すべて差があり、違いがある」ということ。

- ・人の好みは千差万別だから、いろいろな食べ物を用意した方がいい。

◇「海千山千」

「海に千年、山に千年」を縮めた言葉。

海に千年、山に千年住んだ蛇は竜になるという言い伝えから、世間の裏表に通じた、ずる賢い人のこと。どちらかといえば、悪いイメージ。

- ・あの人は世の中の表も裏も知り尽くした海千山千の人物だ。

◇「千客万来」

「たくさんの人が訪れる」こと。商売が繁盛すること。

- ・彼はとても誠実で優しい人柄なので、千客万来のように、いろいろな人が彼のところにやってくる。

◇「千変万化」

「物事がさまざまに変化する」こと。

- ・あの歌舞伎俳優は、千変万化のような早変わりの演技が得意だ。

◇「千言万語」

「千の言語、万の言語」ということから、たくさんの言葉を使うこと。

- ・私はあの人に大変お世話になっており、千言万語を費やしても感謝の気持ちを表しきれない。



※ 誤りやすい「四字熟語」※

(一)	○「一心同体」	×「一身同体」
(二)	○「一世一代」	×「一生一代」
(三)	○「意味深長」	×「意味慎重」
(四)	○「危機一髪」	×「危機一発」
(五)	○「群集心理」	×「群衆心理」
(六)	○「口頭試問」	×「口答試問」
(七)	○「絶体絶命」	×「絶対絶命」

二・「慣用句」

「慣用句」＝二語以上の単語が結びついて、全く異なる意味を持つ、ひとまとまりの言葉・文句や言い回しのこと。習慣として長い間広く使われてきたもの。



- ① 軌道に乗る＝勉強や仕事計画通り順調に進むこと。
- ② 竹馬の友＝幼なじみ。〈竹馬に乗って、一緒に遊んだ幼い時の友達。〉
- ③ 出る幕＝出番。自分が出る場面のこと。
- ④ 二つ返事＝ためらわずに、すぐ承諾すること。〈「二つ返事」で引き受ける。〉
- ⑤ 右に出る＝一番優れていること。
- ⑥ 鶴の一声＝多くの人の意見がまとまらない時、それをまとめることができる権威のある人や実力のある人の一言、一つの言葉。
- ⑦ 清水の舞台から飛び降りる＝思い切って何かをする、必死の覚悟で事を行う、決断すること、など。
 〈「京都の清水寺の舞台と呼ばれる高さ 13 メートルの高い崖の上から、決意をして飛び降りること」から。〉
- ⑧ 石橋を叩いて渡る＝固い石を叩いて、安全を確かめてから渡るように、用心の上にも用心して慎重に行うこと。
- ⑨ 一石二鳥＝一つの石を投げて、二羽の鳥を落とすように、一つのことをして二つの利益を得ること。
- ⑩ うつつを抜かす＝心を奪われて夢中になること。
- ⑪ 目に余る＝ひど過ぎて見るに耐えないこと。
- ⑫ 大器晩成＝大人物は大成するのに時間がかかること。
- ⑬ 人を食う＝人を小馬鹿にしたような言動をとること。
 〈彼の言い分は、「人を食った」話だ。〉
- ⑭ 火を見るより明らか＝はっきりしていて、疑いをさしはさむ余地がないほど明らかなこと。
- ⑮ 輪をかけた＝一段と程度を超えること。話の内容などを誇張すること。
 〈彼は「私に輪をかけた酒飲み」だ。〉
- ⑯ さじを投げる＝救済したり、改善したりする見込みがない、とあきらめること。
 〈「薬の調合の際に使う匙を投げ出してしまおう、つまり、医師が治療の方法がないと診断すること」から。〉
- ⑰ 目から鼻へ抜ける＝非常に賢いこと。頭の回転の早いこと。抜け目がなくすばしこいこと。

- ⑮ 長い目で見^{ながめ}る＝一回^{いっかい}の失敗^{しつぱい}などで人^{ひと}を判断^{はんだん}しないで、将来^{しょうらい}を期待^{きたい}して気長^{きなが}に見守^{みまも}ること。
- ⑯ 身^みを入^いれる＝一心^{いっしん}に努力^{どりよく}すること。
- ⑰ 煮^にえ湯^ゆを飲^のまされる＝信^{しん}じていた人^{ひと}に裏切^{うらぎ}られて、ひどい目^めに遭^あうこと。
- ⑱ 奥^{おく}歯^ばに物^{もの}が挟^{はさ}まった＝思^{おも}っていること^{こと}を率直^{そつちよく}に言^いわないために、何^{なん}となく、すっきりしないこと。はっきり言^いわないこと。
- ㉒ 八^{はっ}方^{ぽう}ふさがり＝ど^どの方法^{ほうほう}も効^{こう}果^かがなく、解^{かい}決^{けつ}しようとしても、どうす^でることも出^で来^きないこと。
 〈八^{はっ}方^{ぽう}は、東^{とう}西^{さい}南^{なん}北^{ぺい}と、北^{ほく}東^{とう}、東^{とう}南^{なん}、南^{なん}西^{せい}、西^{せい}北^{ぺい}の八^{やっ}つの方^{ほう}角^{かく}のこと。
 つまり、ど^どの方^{ほう}向^{こう}も、ど^どち^ちを向^むいても良^よくない、という意^い味^み。〉
- ㉓ 鼻^{はな}息^{いき}が荒^{あら}い＝意^い気^き込^ごみ^めが激^{げき}しいこと。気^き負^おっていること。
- ㉔ 腕^{うで}を振^ふるう＝手^{しゅ}腕^{わん}を発^{はつ}揮^きすること。腕^{うで}前^{まえ}を十^{じゅう}分^{ぶん}に示^{しめ}すこと。
- ㉕ 箸^{はし}にも棒^{ぼう}にもか^かか^から^らない＝あま^{あま}りにも程^{てい}度^どが低^{ひく}くて、ど^どうにも扱^{あつか}い^いにく^くいこと。
 何^{なに}一^{ひと}つ取^とり柄^えのな^ないこと。
 〈細^ほくて小^{ちひ}さな箸^{はし}にも、太^{ふと}くて大^{おお}きな棒^{ぼう}のどち^{どち}らにも引^ひっか^かか^から^らないこと^{こと}から。〉
- ㉖ 五^ご十^{じつ}歩^ぽ百^{ひゃく}歩^ぽ＝似^にたり寄^よつたりで本^{ほん}質^{しつ}的^{てき}に違^{ちが}い^いがな^ないこと。変^かわりばえのし^しな^ないこと。
 大^{だい}同^{どう}小^{しょう}異^い。
- ㉗ 海^{うみ}の物^{もの}と山^{やま}の物^{もの}ともつ^つか^かな^ない＝これ^{これ}からどうな^なるか、これ^{これ}から先^{さき}がどうな^なって
 い^いく^くか、見^{けん}当^{とう}も予^よ測^{そく}もつ^つか^かな^ないこと。どち^{どち}らとも決^きめ^めがた^たいこと。
- ㉘ 鵜^うの目^め鷹^{たか}の目^め＝一^{いっ}心^{しん}に何^{なに}かを探^{さが}す様^{よう}子^す、注^{ちゅう}意^い深^{ぶか}く探^{さぐ}り出^だそうとす^すること。
 〈「鵜^うや鷹^{たか}が獲^え物^{もの}を狙^{ねら}う時^{とき}の鋭^{えい}い目^めつ^つき」から。〉
- ㉙ 白^{しら}羽^はの矢^やが立^たつ＝多^{おほ}くの人^{ひと}の中^{なか}から、この人^{ひと}と思^{おも}う人^{ひと}が特^{とく}別^{べつ}に選^{えら}ば^られること。
 〈「神^{かみ}が、人^{ひと}身^み御^ご供^{くう}として選^{えら}んだ少^{しょう}女^{じょ}の家^{いえ}の屋^や根^ねに白^{しろ}い羽^はのつ^ついた矢^やを射^い立^たてた」という言^いい伝^{でん}え^えから。〉
 〈注^{ちゅう}〉人^{ひと}身^み御^ご供^{くう}＝元^{もと}は、「人^{にん}間^{げん}を神^{かみ}に供^{そな}えること。供^{そな}え^えら^られる人^{ひと}」のこと。
 そこから転^{てん}じて、「人^{ひと}や組^そ織^{しき}の欲^{よく}望^{ぼう}や要^{よう}求^{きゅう}のため^{ため}に犠^ぎ牲^{せい}にな^なること。
 または、その人^{ひと}」という意^い味^み。
 〈彼^{かれ}は人^{ひと}が良^よいから、結^{けつ}局^{きよく}、会^{かい}社^{しゃ}の「人^{にん}身^み御^ご供^{くう}」にさ^されて、会^{かい}社^{しゃ}を辞^やめ
 さ^させ^せら^られた」というよう^{よう}に使^{つか}う。〉

三・ 「早口言葉」

「早口言葉」＝スムーズに読みにくい言葉を、いかに素早く正確に言えるかを競う「言葉遊び」だ。舌がもつれて、最後まで正しく言えないことが多い。



- (1) なまむぎ なまごめ なまたまご
(生麦 生米 生卵)
- (2) あかまきがみ あおまきがみ きまきがみ
(赤巻紙 青巻紙 黄巻紙)
- (3) となりの きゃくは よくかきくう きゃくだ
(隣の 客は よく柿食う 客だ)
- (4) ぼうずがびょうぶに じょうずに ぼうずのえをかいた
(坊主が屏風に 上手に 坊主の絵を描いた)
- (5) とうきょう とつきよ きよかきよく
(東京 特許 許可局)
- (6) あかパジャマ きパジャマ ちゃパジャマ
(赤パジャマ 黄パジャマ 茶パジャマ)
- (7) おやがめ こがめ まごがめ ひまごがめ
(親亀 子亀 孫亀 ひ孫亀)
- (8) このくい の くぎは ひきぬきにくい
(この杭 の 釘は 引き抜きにくい)
- (9) ろうにやく なんによ
(老若 男女)
- (10) こつ そしょうしょう
(骨粗鬆症)
- (11) かせい たんさしゃ
(火星 探査車)
- (12) しんしゅん シャンソンショー
(新春 シャンソンショー)
- (13) しょうさいを ちょうさちゅう
(詳細を 調査中)
- (14) りょうの にゅうよくりょう
(寮の 入浴料)

- (15) バナナのなぞは まだなぞなのだぞ
 (バナナの^{なぞ}謎は まだ^{なぞ}謎なのだぞ)
- (16) こうかきょう の きょうきやく
 (高架^{こうかきょう}橋 の 橋^{きょうきやく}脚)
- (17) かきやくせん の りょきやく
 (貨^{かきやくせん}客船の^{りょきやく}旅客)
- (18) まじゅつし まじゅつ しゅぎょうちゅう
 (魔^{まじゅつし}術師 魔^{まじゅつ}術 しゅぎょう^{しゅぎょうちゅう}修業中)
- (19) スモモも ももも もものうち ももも スモモも もものうち
 (スモモも 桃^{ももも}も 桃^{ももも}のう^{ももも}ち ももも スモモも 桃^{ももも}のう^{ももも}ち)
- (20) かえるぴよこぴよこ 3 (み) ぴよこぴよこ
 あわせて ぴよこぴよこ 6 (む) ぴよこぴよこ
 (蛙^{かえる}ぴよこぴよこ 3 (み) ぴよこぴよこ
 あ^あわせて ぴよこぴよこ 6 (む) ぴよこぴよこ)
- (21) うりうりが うり うりにきて
 うり うりのこし うりうりかえる うりうりのこえ
 (瓜^{うり}売^{うり}りが 瓜^{うり}売^{うり}りに^き来て 瓜^{うり} 売^{うり}り^{のこ}残し
 売^{うり}り^{うり}帰^{かえ}る 瓜^{うり}売^{うり}りの^{こえ}声)



四・「回文」

「回文」＝初めから読んでも、終わりに読んでも、同じ「音と意味」の文章。
「言葉遊び」の一種。英語では **palindrome** (パリンδροーム)。



- (1) 竹藪 焼けた
(たけやぶ やけた)
- (2) 作るか 光る靴
(つくるか、ひかるくつ)
- (3) ダンスが 済んだ
(ダンスが すんだ)
- (4) 世の中ね 顔か お金か なのよ
(よのなかね かおか おかねか なのよ)
- (5) 私 負けましたわ
(わたし まけましたわ)
- (6) 夜 人参 煮るよ
(よる ニンジン にるよ)
- (7) イカ 食べた かい？
(いか たべた かい？)
- (8) 夏まで 待つな
(なつまで まつな)
- (9) 内科では 薬のリスクは でかいな
(ないかでは くすりのりすくは でかいな)
- (10) 薬飲み 無理するスリム 身のリスク
(くすりのみ むりするすりむ みのりすく)

英語の回文

"Now I see, referees, I won."

《そうか、審判の皆さん、おれの勝ちだ》

五・「^{ぎ おん ご}擬音語」と「^{ぎ たい ご}擬態語」

自然界のいろいろな音、声、物事の^{おと こえ もの}状態や動きを、「音」(字句)で^{しょうちようてき ひようげん}象徴的に表現した語を「擬音語」、「擬態語」という。「擬音語」と「擬態語」を^{そうしやう}総称して「擬声語」という場合もある。

フランス語で onomatopée (オノマトペ) という。

「擬音語」と「擬態語」の違いは、実際に「音」がするかどうか。



^{ぎ おん ご}擬音語

人、動物、物が^{おと}発する音(おと)を「音(おん)」(字句)で表現した言葉。

つまり、「音」を真似た表現だ。

例えば、「風が^{かぜ}ビュービュー吹く」、「雷^{かみなり}がゴロゴロと^な鳴る」など。

- ・メーメー (羊^{ひつじ}の鳴き声^{なごえ})
- ・ブーブー (豚^{ぶた}の鳴き声^{なごえ})
- ・ドキドキ (心臓^{しんぞう}の鼓動^{こどう})
- ・ドカン (爆発音^{ばくはつおん}、衝撃音^{しょうげきおん})
- ・ガチャン (ガラスの割れる音^{わおと})
- ・シトシト (雨^{あめ}の音^{おと})
- ・サワサワ (草^{くさ}の揺れる音^{ゆおと})
- ・ビリビリ (紙^{かみ}が破れる音^{やぶおと})
- ・バタン (ドアの閉まる音^{しおと}など)

「音や声」を^{おと こえ}発する主体が同じでも、言語によって「表現」が^{こと}異なってくる。

例えば、「犬^{いぬ}が吠える声^{ほこえ}」は、言語で次のように違う。

- ・日本語———wan-wan (ワンワン)
- ・英語——— bow-wow, bark-bark, woof-woof, arf-arf, ruff-ruff
- ・ドイツ語 ———wau-wau
- ・フランス語 ——— ouaf-ouaf
- ・中国語——— wang-wang (汪汪)
- ・韓国語——— meong-meong

^{ぎ たい ご}擬態語

人や物の^{もの}状態や感情^{じやうたい かんじやう}など、本来、音^{おと}を発しない事柄^{ほんらい}について、「音」(字句)で表現した言葉。つまり、様子^{ようす}を表現した言葉だ。

例えば、「花^{はな}びらが、ひらひらと舞う」、「クルクルと回^ま転する」など。

- ・ばらばら———^ち散らばっている様子
- ・メロメロ———^{ほこ}惚れ込んでいる様子
- ・たっぷり———^{ゆた}豊かで^{よゆう}余裕のある様子
- ・キラキラ———^{ひかり}光。^{かがや}輝き
- ・そよそよ———^{おだ}穏やかな^{かぜ}風
- ・ギラギラ———^{きょうれつ}強烈な^{ひかり}光。^{きょうれつ}強烈な^{かがや}輝き
- ・ふわふわ———^{かる}軽く^{ただよ}漂ったり、^{かる}軽く^ゆ揺れる様子

◎ 日本語は「擬音語、擬態語が豊かな言語」と言われている。

例えば、【笑い方】を表現する言葉として、次のような「オノマトペ」がある。

この中には、「擬音語」なのか、「擬態語」なのか、分類が^{ぶんるい}難しい^{むずか}表現もある。

「擬音語」

- ・ワハハ ・アハハ ・ゲラゲラ ・ケラケラ
- ・ゲラゲラ ・クスクス ・コロコロ ・ケタケタ
- ・ゲタゲタ ・ウハウハ ・クツクツ ・アハアハ
- ・ウヒヤヒヤ・ウハッハ ・エヘッ ・ウフッ
- ・ウフフ ・イヒイヒ ・クスッ ・ゲヘヘ
- ・ガハガハ

「擬態語」

- ・ニコニコ ・ニヤリ ・ニヤニヤ ・ニコリ
- ・ニコッ ・ニタリ ・ニタッ ・ニッ
- ・ウヒョヒョ ・ヘラヘラ ・フニヤ

